

オスカー・ワイルドの批評的無意識 —— 批判とナイーブさの間の「批評」

騎馬 秀太

現代の文学研究は、「批判的」であることが規範となり、習慣化した結果、少しでも批判の矛先を緩めて美的なものを経験を語る身振りを「ナイーブ」だとしてタブー視する傾向にある。ポストクリティーク (Postcritique) の代表的論客であるリタ・フェルスキは、こうした批判への「強迫」が、皮肉にも我々に批判の権威を無批判に受け入れさせている現状を指摘し、批評実践の見直しの必要性を『クリティークの限界』(*The Limits of Critique* 2015)において主張している。換言すれば現代の文学研究は、批判を強迫的に繰り返した結果これを手放せなくなるという悪癖 (あるいは批判中毒) に陥っている。本稿はこのような批判への過度な依存から文学研究が自由となるための糸口を、オスカー・ワイルドの批評理論のうちに読み解くものである。

はじめに一言断っておくべきなのは、フェルスキの議論は批判の限界に光を当てるだけでなく、ブリュノ・ラトゥールの「アクターネットワーク理論」などを参照しつつ新たな批評の展望を素描しているということだろう。ただ、ポストクリティークを含めた近年の批評理論 (例えば new formalism, affect theory, surface reading など) は、現代の批評空間への見事な批判として機能しながらも、それへの強力な代替案を明確に提示し、現状で支配権を獲得している「歴史・文脈主義」パラダイムに代わる文学研究の新たなパラダイムとなるまでには至っていない印象を受ける。したがって本稿は、フェルスキの代替案そのものを辿ることはしていない。ただ本論への導入の代わりとして、ジョセフ・ノースの『文芸批評』(*Literary*

Criticism 2017)における議論にあらかじめ言及しておきたい。ノースは、フェルスキが無意識に近年の批評理論と共有する立場に光を当てることで、フェルスキ自身が描き切れていない新たな批評パラダイムの展望を示しているからである。

『文芸批評』においてノースは、近年の批評動向を分析し、これらを突き動かしている「批評的無意識」(critical unconscious)に光を当てている。「批評的無意識」という名前が暗示するように、ノースは「つねに歴史化せよ！」というスローガンで始まるフレドリック・ジェイムソンの『政治的無意識』(*The Political Unconscious*)に象徴される文学研究の「歴史・文脈主義」パラダイムを、ここでは対話の相手として念頭に置いている。ノースによれば、現在の「歴史・文脈主義」は、文化や社会を分析し、科学的な知を生産する専門的な営為の対象として文学テキストを扱うが、こうした「学者的転回」(scholarly turn)は文学研究のもう一つの柱である「批評」(criticism)の営為を抑圧する結果となったと言う。ここでの「批評」とは、I.A.リチャーズが「実践批評」(practical criticism)の形で提示し、新批評(New Criticism)によって文学研究における特権的な読みの手法として敷衍された「精読」(close reading)の実践を指す。それは本来、読者の美的感性を陶冶することを目指し、文学テキストをその特権的訓練の場とする教育・啓蒙の実践であるが、こうした「批評」、「美的経験」の再考(あるいは再興)として、近年の多くの批評理論を理解することができるとノースは主張するのである。そうすることで彼は「歴史・文脈主義」の弁証法的な対立項として「批評主義」パラダイムを措定する。「つねに歴史化せよ！」という「批判」への強迫により、知らぬ間に批判中毒に陥った現代の文学研究は、科学的な「分析」に終始するあまり美的なものから距離を取り、「批評」を抑圧することになった。この「批評」の重要性を、近年の批評理論は再考し始めているのである。本稿はフェルスキの議論を「批評主義」パラダイムの文脈で読み解いていく。

フェルスキのポストクリティークに加えて本稿の議論の核となるのは、脱構築批評の代表的論客であるポール・ド・マンがロマン主義の読解より導き出した「比喩の盲目性」の理論である。ド・マンの議論については次節で論じることになるが、続く第2節ではこれが「批判中毒」を論じるフェ

ルススキの議論と通ずることを示す。その上で結論となる第3節において、ワイルド特有のダンディズム的批評実践が、フェルススキを含めた近年の批評理論が目指す、批判への過度の依存から自由となった批評実践のモデルとなることを明らかにしたい。

クリティークの極北に位置するように思われるド・マンを、「批判的であること」の弊害を指摘するポストクリティークの代表的論客であるフェルススキと関連づける本稿の身振りは、一見すると牽強付会の印象を与えるかもしれない。実際フェルススキ自身は、現代批評の悪癖を、まさに脱構築主義と関連付けながらダンディズム的傾向として批判し、こうしたダンディーの先駆としてワイルドの名を挙げている。したがってフェルススキの議論を文字通り受け取るなら、ド・マンやワイルドこそ現代批評の批判中毒を体現する存在であり、彼らに逆に中毒からの脱却の可能性を探る本稿は誤読を犯していることになる。しかしこうした印象主義的な批判は、批評、そして規律化する前の批判が本来持ち合わせているニュアンスやムードの複雑さを見失うことで、それ自体救いようのない盲目さに陥ってしまっている。類型化を行いがちなフェルススキの議論もこうした過ちを時に犯しており、ワイルドの名にしても連想によって挙げられているに過ぎず、具体的な読解は行なわれていない。これに対して本稿は、「芸術家としての批評家」(“The Critic as Artist”)におけるワイルドの批評理論を読み解くことで、フェルススキが見逃しているダンディズム的批評実践の有り様、すなわち批評がその批判中毒から自由となる糸口を示すような批評のモデルを、ワイルドに見出すつもりである。

多くの依存症にはしばしば否認が付き纏う。さらに過度な依存(中毒)と適度な依存(健康な習慣)との違いも時に曖昧である。したがって批判中毒の自認、つまり自らが批判の権威を知らぬ間に盲信している事実を意識化することは、非常に困難な作業である。しかしこの盲信への自覚無しに、依存からの脱却を望むこともまたできないだろう。本稿は、批判への依存を自覚しつつ、さらにこれと上手に付き合っていく、そのような批評実践の有り様を、ド・マン、フェルススキ、そしてワイルドの批評理論を通して素描することを目標とする。

比喩と批判の盲目性——ポール・ド・マン

『墓碑銘論集』(*Essays Upon Epitaphs*)において、ロマン派詩人ワーズワスは死者に声を与えることの危うさ、両義性について考察を行なっている。卑近な例を挙げるならば、たとえば故人の遺産相続が往々にしてトラブルを招きがちであることなど、この危うさの証左と言えるだろう。¹ここではまず、この厄介さについて、少し考察してみたい。

なぜ「遺産」は厄介なのだろうか。相続されるモノそれ自体の価値が原因の一端であることは間違いないが、問題はもっと複雑だろう。想像がつくように、何かを受け継ぐということは、必然的に送り手と受け手の間の「関係」を前景化させる。するとこの関係を取り結ぶモノは、それ自体の価値を超えた機能を果たすようになる。故人への愛情、悲しみ、憎悪といった情動や、それと深く結びついた記憶、そして愛のような形而上学的な概念までも表現する「比喩」として、相続財産が機能するようになるのである。このことが相続につきまとう複雑なドラマを生み出す原因となっていると、ひとまず言えるだろう。言葉を失った者の代わりに、比喩としての「遺産」は残された者に声を届ける。この声は当然、もとは不在のものであるがゆえに、剰余である。その限りで、残された人間が受け取る声は、彼ら自身が与えた声でもあり、オリジナルを欠いて漂うその声は常に出所不明の危うさと共にある。だからこそ(人生は旅であるという比喩を前提に)“Pause, Traveller!”という、死者があたかも旅仲間である生者に声をかけるような墓碑銘と出会ったワーズワスは、これを死者と生者の二つの世界を取り結ぶ「優しい虚構」(*tender fiction*)と呼びつつも、どちらかと言えば生者が自身の声で語る墓碑銘の方が好ましいだろうと、曖昧な結論を下すことになるのである。

ポール・ド・マンは、「脱-顔化としての自伝」(“Autobiography as De-Facement”)においてワーズワスの考察を引き継ぎ、この「声」が活着している人間によって死者に与えられた「比喩=人影」(*figure*)であり、そのような修辭的關係 (*figuration*)が介在するゆえに、死者の顔は常に損なわれざるを得ない (*disfigured*) と論じた。²顔を与えるとともに損なうこの修辭プロセスをド・マンは「活喩法」(*prosopopeia*)と説明しているが、これは顔のないものに顔を与えるゆえに常に「濫喩」(*catachresis*)とならざるを得ない (*De*

Man, Resistance 44)。要するにこのような修辭的媒介により、我々は見えるはずのないものを見てしまう、つまり見すぎてしまうがゆえに誤認してしまうのである。この時重要なのが、この修辭機能の過剰さ、つまり活喩法を通して「見すぎてしまう」という事実を、我々がしばしば忘却し、抑圧してしまう傾向にあるという点である。ド・マンはこれを「比喩の盲目性」と呼び、こうした修辭機能の忘却、すなわち「自然化」が我々のあらゆる認識を特徴付けていると論じている。³「比喩の盲目性」はこのようにして、我々が常に対象に顔を与えることによって対象から顔を奪っているという事実を抑圧してしまうのである。

このように「比喩の盲目性」は、修辭構造の忘却、自然化を伴うゆえに、我々が対象を明晰に認識しこれを「自然」と考えるような場合に最も前景化することになる。したがって例えば対象の客観的記述を通してこれを明晰に認識することを目指す「科学的分析」において、認識論的な盲目さはより顕著となるだろう。それゆえド・マンやジャック・デリダを旗手とするポスト構造主義以降の批評理論は、実証主義的な自然科学や歴史研究が前提とする「自然主義」の盲目さを繰り返し「批判」してきた。

ところがそのような批判が習慣化する時、「比喩の盲目性」特有の厄介な捻れ状況が生じることとなる。これを要約すると次のようになるだろう。すなわち、批評理論による反自然主義的立場からの批判が、ひとたび自然主義をめぐる二項対立的な硬直状態へと陥るとき、いつしか批判は、自然主義の盲目さを見抜き、これを暴き出す「洞察」の立場に身を置くようになる。しかしながらすでに見たように、「比喩の盲目性」はそもそも「見すぎてしまう」、つまり自身の「洞察」の透明性を疑わないがために生じる誤読であった。言うなれば盲目と洞察はつねに弁証法的な関係を形作っており、洞察はいつでも盲目に転じ得る。したがって反自然主義的立場から自然主義の盲目を洞察、批判する脱構築主義的身振りは、知らぬ間に二次的な盲目性、すなわち「批判の盲目性」へと陥りかねないのである。

それでは批判を行う主体が自らの盲目性を強く自覚すれば問題は解決するかと言えば、事はそう単純でもない。自身の盲目性への自覚、すなわち「自己批判」もまた、「洞察」として機能してしまうからである。この点において「批判の盲目性」は、「比喩の盲目性」よりもさらに厄介な盲目性に

付き纏われていると言えるだろう。「批判」と「洞察」の強い結びつきゆえに、それだけ自身の盲目性と向き合うことが困難となるのである。

それが「洞察」であれ自己の「盲目性への洞察」であれ、批判の成功は常に「見すぎてしまう」がために盲目性へと墮する危険を孕む。批判の成功はゆえに常にすでに失敗と紙一重である。「成功ほどに失敗するものはない」(“Nothing Fails Like Success”)と題された論文でバーバラ・ジョンソンは次のように述べる。

Derrida brings to his reader the surprise of a nonbinary, undecidable logic. Yet comfortable undecidability needs to be surprised by its own conservatism. My emphasis on the word *surprise* is designed to counter the idea that a good deconstruction must constantly put his own enterprise into question. This is true, but it is not enough. It can lead to a kind of infinite regress of demystification, in which ever more sophisticated subtleties are elaborated within an unchanging field of questions. (15)

脱構築主義の強い影響下にある現代批評は、自然主義的な客観知を批判し、あらゆる知の根源的な無根拠性やその虚構性を暴き出す中で次第に制度化し、結果的に知の無根拠性や決定不能性に慣れ親しみ、これに「安んじる」保守主義へと陥ってしまっている。既存の価値や知の正当性を問いに付すことで、本来「驚き」をもたらすはずの批判行為は、こうして微温的な批判を習慣的に繰り返し、飼い馴らした驚きで自己満足に浸りながら、革命的な身振りだけを反復するようになる。

では再び批判が「驚き」を取り戻すためにはどうすれば良いのか。ジョンソンはその答えとして「無知」(ignorance)の概念を再考し、それとの上手な付き合い方を学び直すことの必要性を説いている。少し長くなるが、重要な箇所なので以下に引用する。

What the surprise encounter with otherness should do is lay bare some hint of an ignorance one never knew one had. Much has been made of the fact that “knowledge” cannot be taken for granted. But perhaps rather than

simply questioning the nature of knowledge, we should today reevaluate the static, inert concept we have always had of ignorance. Ignorance, far more than knowledge, is what can never be taken for granted. If I perceive my ignorance as a gap in knowledge instead of an imperative that changes the very nature of what I think I know, then I do not truly experience my ignorance. The surprise of otherness is that moment when a new form of ignorance is suddenly activated as an imperative. If the deconstructive impulse is to retain its vital, subversive power, we must therefore become ignorant of it again and again. (16)

惰性化した「無知」の概念は、懐疑主義に安んじる「批判」が、習慣的に前提とするようになった認識論的な「盲目性」一般として理解できるだろう。すると驚きを伴う「無知」は、この「盲目性」の前提、すなわち批判がいつの間にか自明視するようになった「盲目性への洞察」を再び問いに付すことによってのみ経験され得るものであると言える。ゆえにジョンソンは “It is only by forgetting what we know how to do . . . that those thoughts and that knowledge can go on making accessible to us the surprise of an otherness we can only encounter in the moment of suddenly discovering we are ignorant of it” (16)と結論づける。このように「批判」がもたらした「洞察」を忘却し、再び自身の無知、盲目さに驚くことを、本稿の文脈で「ナイーブさ」と読み替えることもできるだろう。それは批判の洞察を括弧に入れることで、「批判」を真の意味でその「盲目性」へと曝すことでもある。次節で扱うフェルススキのポストクリティークは、同様の身振りによって硬直した「批判」に再び驚きをもたらすための介入であり、その点で「批判の盲目性」の厄介さに光を当てるド・マンやジョンソンの議論と地続きにある。

批評の悪癖、批判中毒——リタ・フェルススキ

ポストクリティークの代表的論客であるリタ・フェルススキは、その著書『クリティークの限界』のなかで、現代の批評の悪癖に批判の矛先を向けている。彼女によれば、現代批評はテキストが常に背後に何かを隠していると考え「懐疑の解釈学」を基本スタンスとしている。⁴その結果として

批評家は、テキストが囚われた幻想（例えばイデオロギーや症候など）を暴き出し、その真理を露呈させる批判の知的権威を、ある種の「ムード」として享受するようになる。知が力であるように、批判は力である。ゆえに知的権威をアウラとして纏う批判のムードは、ある種の規範として機能し始める。この規範的力に従うことで批評家たちは、真理を暴き出す批判の身振りに酔いしれ、これを繰り返すことで強固な「批評の習慣」を形成するようになるのである。⁵言うなれば現代の批評空間は、「批判的」であることが極端な習慣、ある種の強迫観念となっており、結果として無批判なナイーブさがタブー視されるようになっている。“Who would want to be associated with the bad smell of the uncritical?” (Felski 8)「嗅覚」と批判を結びつけることでフェルスキが前景化させるのは、現代批評が「批判的」であることに心酔するあまり、批判の権威に盲従し、ナイーブさを感情的に拒否する「ナイーブな」精神と化してしまっているという皮肉な事実である。⁶

以上のようなフェルスキの現状分析は、本稿の文脈に照らして次のように言い換えることもできるだろう。すなわち、批判を「習慣」(第二の自然)へと変容させることによって、我々は批判の権威を自然化してしまい、その結果として皮肉にも「批判の盲目性」へと陥っている。批判の威厳は我々が活喩法によって与えた「損なわれた顔」に過ぎないのであるが、その規範的栄光に目を眩ませた我々は、この修辞構造を忘却し、尤もらしく荘厳に構える批判の面影を神聖視するようになるのである。このような形でフェルスキは現代批評が批判の盲目性へと習慣化してしまっている現状を指弾する。⁷

ここまでの議論において本稿は、フェルスキが「批判の盲目性」を「批判中毒」として描き出す様子を明らかにした。残りの部分では、フェルスキの議論をオスカー・ワイルドの批評理論と比較することで、現代批評が批判中毒から抜け出す糸口を提示するつもりである。しかしはじめに述べたように、フェルスキは「ダンディー」を批判中毒へと墮した現代批評の特権的形象としつつ、その先駆としてワイルドの名を挙げている。これに対して本稿は最終節において、フェルスキが見落としているワイルドの「批評的無意識」に光を当て、これが誇張された「ダンディー」の形象と矛盾す

る側面を有することを示し、それによりワイルドがすでにフェルススキの議論を先取りしている事実を論じることになる。ただフェルススキ自身の「批判の盲目性」を照射することは、その厄介さを辿る本稿の議論にとっても有益であるだろう。したがってひとまずは彼女の論を追うことにしたい。

そもそも批評の習慣化、第二の自然化を指摘するフェルススキの議論がとりわけ鋭利なものとなるのも、ポスト構造主義の影響を強く受けた現代批評が、(すでに見たように)ナイーブな自然の現前から徹底的に距離を置くことを信条とするにもかかわらず、この反自然主義を(第二の)自然と化してしまうことの皮肉を彼女が指摘するからである。こうしたポスト構造主義的な反自然主義の特権的形象としてフェルススキは「ダンディー」を挙げ、そこでワイルドの名にも言及している。

Why have nature, the natural, and naturalizing gotten such a bad rap? We have already touched on one source of inspiration: the figure of the dandy, whose embrace of artifice and detachment is accompanied by a deep-seated distaste for anything associated with nature. In the tradition of aestheticism pioneered by Baudelaire and sustained by Wilde, Huysmans, D'Annunzio, and others, the Romantic vision of nature as a spiritual haven and solace is subject to withering scorn. (71)

自然の直接的現前を信じることは、対象との関係が言語や社会そして精神によってつねにすでに媒介されている事実を忘却、自然化する盲目さへと通じている。ポスト構造主義の影響を強く受けた現代批評はこの盲目性を斥けるため、自然の現前と、これをナイーブに信じる(とされる)ロマン主義的主体から徹底的に距離を置こうとするのである。そしてこうした反自然、反ロマン主義的態度を「ダンディー」の形象は的確に要約している。ボードレールが論じるように、ダンディーはナイーブに自然を信じる「大衆」の無批判な精神から自身を差異化することによって「個性」を創造する。そうやってダンディーは、粗野な自然に心動かされることのない洗練された批判精神として自らを描き出すのである。このように自然世界からの孤立をアイデンティティーとするダンディーは、ボードレール曰く「自己崇

拜」を信条とし、自身のストイックで無関心な批判精神を神聖化し、これに妄執するようになる。こうした批判精神の神聖化、自己崇拜、ナイーブな大衆と自然の蔑視を念頭におく時、「ダンディー」の形象がなぜフェルスキにとって有用となるのかが明瞭となるだろう。すなわち、ダンディーは「批判的」であることを強迫観念とするようになった現代批評のエリート主義を的確に要約する形象なのである。⁸すでにみたように、このように「批判的」であることに執着する時、批評は機械的な反復強迫の「ナイーブさ」へと知らぬ間に墮することになる。ダンディーの反自然、反ロマン主義はこうして皮肉にもそれが批判していた当のナイーブさへと転落することになるのである。⁹

批評的無意識——オスカー・ワイルド

一見すると、ナイーブな大衆から距離を置き、批評を高尚な芸術として提示するワイルドのダンディズムは、同様の批判中毒に陥っているようにも思われる。このことは例えば「芸術家としての批評家」における反自然主義に見て取れるだろう。ワイルドは自己の魂の表現としての芸術的批評の外に広がる自然（ここでは精神活動の外に存在する諸々の事象を総称してLifeと表現されているもの）を次のように危険な存在として斥けている。“Life! Life! Don't let us go to life for our fulfilment or our experience. . . . It is through Art, and through Art only, that we can realize our perfection; through Art, and through Art only, that we can shield ourselves from the sordid perils of actual existence” (274).

このようにワイルドは、芸術行為は自然を排して行われるべきだと主張する。自然に訴えることは芸術の創造性を殺し、これを日常性と凡庸さの反復へと還元してしまうと考えるからである。¹⁰したがって新たな芸術の創造は、常に自然とは独立に新たな形式を創造する精神の活動を必要とする。ワイルドはこれを「批評精神」と呼んでいる(“The Critic as Artist” 254)。批評を芸術よりも創造的とワイルドが述べるのもこのためであるが、真に創造的な芸術はそれゆえ、常に批評精神による新たな形式の創造を必要とする。つまり芸術を創造的にするのは、自然とは独立した芸術家の批評精神なのである。¹¹このようにワイルドの批評理論は、一見すると徹底した

反自然主義を貫いており、この点においてフェルススキの描いて見せたダンディズム的批評と多くを共有している。¹² 実際、ワイルドの批評精神を自然から独立させるのは、ボードレールが指摘したような「自我崇拜」であり、これに創造の権威を与えるのは非常に観念論的かつ神秘主義的な「自己の魂」という形而上学的概念である。¹³ したがってワイルドは自然を排除しながら、批評精神の権威を条件づける段になると、これをナイーブに自然化してしまう。これはまさにフェルススキが提示してみせた批評の悪癖の典型的身振りであろう。

しかしもう少し詳細にこの批評精神の有り様を覗いてみると、このような(第二の)自然化とは別の側面が見えてくる。注目したいのはフェルススキも指摘していた「批判のムード化」である。すでに見たようにナイーブな自然から距離を置こうとするダンディーは、実体の伴わないある種のムードとして批評精神の活動を経験する。ワイルドもこの点においてフェルススキと同様の議論を展開しており、「芸術のねらいはムードを創造することに尽きる」と主張しつつ、芸術に創造性を付与する批評精神も同様にムードとして理論化している。¹⁴ 問題はムードとしての批評精神がいかにして正当な「批判」を行い、新たな創造に与することになるかであるが、ここにいたってワイルドの記述はフェルススキの「ダンディー像」とは別の道を辿ることになる。すなわち、ワイルドはムードを移り気な精神の主観的運動として描くことで、自身の判断の客観性から距離を置くのである。

[E]ach mode of criticism is, in its highest development, simply a mood, and that we are never more true to ourselves than when we are inconsistent To know the truth one must imagine myriads of falsehoods. For what is Truth? In matters of religion, it is simply the opinion that has survived. In matters of science, it is the ultimate sensation. In matters of art, it is one's last mood. (282-83)

皮肉とも露悪とも取れるような調子で、ワイルドの批評精神は自らの判断が不安定で無根拠なものであることを認める。こうして批評精神のムードが常に移ろい、一定の形式を維持しないとすれば、フェルススキの指摘す

るような形で批判のムードが規律化し、単一の「習慣」となることもないだろう。このようにしてワイルドのダンディズム的批評は、批評精神のムードが習慣へと自然化する段階、すなわち創造性が規律へと反転しようとする段階において、批判の認識論的な權威を宙づりにしてしまう。批判と情動を結びつけることで、創造性を欠いた批評の習慣化に抵抗するのである。

とはいえ、ダンディ的「批判」を維持しながら、同時に批評の習慣化に抗い、ムードの次元に留まること、これが非常に困難な試みであることも忘れるべきではないだろう。ワイルドが我々に示すダンディズム的批評の道は、いわば「自然」と「第二の自然」の間で繰り広げられる非常に高度な認識論的綱渡りである。一方で「自然」から独立したダンディズム的批判精神を生み出すためには、対象の影響に動じることのない、ストイックで安定した精神状態を維持する必要がある。他方でこうした精神の鍛錬は、批評の習慣という「第二の自然」へと容易に転化する危険があるゆえ、精神の鍛錬が完全な習慣へと至る手前において、ワイルドは自らのストイシズムに抗い、これを移ろいやすいムード、すなわち感動する魂へと転じる必要がある。つまり無感動を至上命題とするダンディの身振りを時に手放し、自らを感動する魂のナイーブさへと晒す必要が出てくるのである。いうまでもなく批判中毒のダンディにとって、ナイーブさの解毒剤に手を伸ばすことは、相当に困難である。だがワイルドの批評理論は、この困難な綱渡りを軽やかに演じることで、批評がその悪癖を脱する道程を示してみせる。

残念ながらフェルスキが提示してみせた批評空間の現状は、我々がこのような認識論的綱渡りに未だ成功していない事実を告げている。批判が自身の「洞察」を盲信する限り、批評の習慣は変わらず「批判の盲目性」を再生産し続けるだろう。これに対してワイルドのダンディズム的批評は、批評精神に芸術家の感動する魂を重ねることで、無感動な批評の規律的リズムを、より流動的で驚きを伴うような創造的リズムへと変容させてみせる。

Art is a passion, and, in matters of art, Thought is inevitably coloured by emotion, and so is fluid rather than fixed, and, depending upon fine moods and exquisite moments, cannot be narrowed into the rigidity of a scientific

formula or a theological dogma. (284)

芸術家としての批評家は、このように自らの批評精神を理性の規律性から情動の流動性へと連れ戻す。その時、「批判」はノースの言う「批評的無意識」を意識化することで、再び美的なものに接近することになるだろう。この地平においてワイルドの批評精神はすでにダンディーであることをやめていると言っても良い。¹⁵ 批評の明晰さを突き詰めていった結果、こうしてダンディズムの批評はその情動的な核に触れる。その時ダンディーは、批判していたロマン主義的精神の感動する魂に最も接近することとなる。¹⁶ つまり批判精神がその極北において自らの限界、盲目性と向き合う地平において、ワイルドは批判が再び驚きと出会うために必要な無知、ナイーブさへと自らを曝け出すのである。

*本稿は2019年12月14日に日本女子大学目白キャンパスで行われた日本ワイルド協会第44回大会におけるシンポジウム「ロマン主義の遺産とオスカー・ワイルド」の口頭発表原稿「オスカー・ワイルドと批評の習慣」に加筆修正を施したものである。

注

- 1 「遺産」や「相続」という表現は、加筆前の本稿を口頭発表したシンポジウムのタイトル「ロマン主義の遺産とオスカー・ワイルド」を前提に用いている。
- 2 De Man, *Rhetoric* 74-77. ここで注意しなければならないのは、すぐ後に見るように、ド・マンが比喩の暴力(disfigurement)によって意味しているのは、対象を十分に表象できない言語の欠性ではなく、あまりにもよく表象してしまうがためにその欠性を我々に忘れさせてしまう言語の修辭的機能の過剰さであるということだろう。例えば以下の記述を参照。“The repetitive erasures by which language performs the erasure of its own positions can be called disfiguration” (*Rhetoric* 119).
- 3 例えばド・マンは次のように述べる。“All language is language about denomination, that is, a conceptual, figural metaphorical metalanguage. As such, it partakes of the blindness of metaphor when metaphor literalizes its referential indeterminateness into a specific unit of meaning” (*Allegories* 152-53).
- 4 「懐疑の解釈学」は、ポール・リクールが*Freud and Philosophy*の中でフロイト、マルクス、ニーチェに共通する態度を論じる際に用いた表現である。あらゆる場所に「罪」や「秘密」の匂いを嗅ぎつけるこのような批判の過剰さに関し

でフェルスキは、イヴ・セジウィックの「パラノイアの読解」に関する議論も参照している。Sedgwick (123-151)を参照。Stephen Best and Sharon Marcusは、同様に「懐疑の解釈学」の行き過ぎを、「深く」掘り下げて秘密を暴くその身振り結びつけて批判し、そのような「症候的読み」(symptomatic reading)の代替案として「浅い読み」(surface reading)を提示している。

- 5 フェルスキは次のように説明する。“Like any other repeated practice, it eases into the state of second nature, no longer an alien or obtrusive activity but a recognizable and reassuring rhythm of thought. Critique inhabits us, and we become habituated to critique” (21).
- 6 批判へと向かう動機が、このように徹底して批判意識を欠いている可能性があることに、我々はあまりにも無自覚である。それもこうした不純な動機を語り始めた途端に、我々の「批判中枢」が反射的に「はしたない」と横槍を入れるからであろう。しかし我々が批判に向かう理由、それは実にナイーブに、“Critique”というフランス語の響きが「カッコいい」からだったりもするはずである。“Crrritique! The word flies off the tongue like a weapon, emitting a rapid guttural burst of machine-gun-fire. There is ominous cawing staccato of the first and final consonants, the terse thud of the short repeated vowel, the throaty underground rumble of the accompanying r. ‘Critique’ sounds unmistakably foreign, in a sexy, mysterious, pan-European kind of way, conjuring up tableaux of intellectuals gesturing wildly in smoke-wreathed Parisian cafés and solemn-faced discussions in seminar rooms in Frankfurt” (Felski 120). 超自我的権威に付き従う批評の習慣はこうしたナイーブさを抑圧するだけでなく、批評を通じた快楽や喜びといった感情の言語化を妨げることになる。結果、ノースの指摘するように「美的なもの」を抑圧することになる。「反対することのレトリック」(a rhetoric of againstness)に満ち溢れた批評の習慣は、接頭辞の“de-”を“re-”より評価し、「愛」(eros)よりも「争い」(agon)を追い求めるが、こうした懐疑の解釈学はあくまで批評の一部であるべきであり、すべてとなるべきではないとフェルスキは主張する。
- 7 “The negativity of critique is thus transmuted into a halo effect—an aura of rigor and probity that burnishes its dissident stance with a normative glow” (Felski 8).
- 8 こうしたエリート主義を、ノースは「学者的転回」として描き出していた。また例えばミシェル・フーコーは、「啓蒙とは何か」において(イマニュエル・カントの同名のエッセイを参照しながら)啓蒙と批評のあるべき姿を論じる中で、近代人をダンディズムの形象として描いている。ジュディス・バトラーは、そのようなダンディー的のストイシズムや学者的エリート主義とは異なった、徳と美と快楽とが結びつくような批評実践の可能性を、フーコーの議論に読み取っている。そこでバトラーは、「批判」という言葉を用いながらも、ノースの議論における「批評的無意識」を体現するかのような、批判中毒を乗り越えた先の批評のあり方を素描している (Butler 212; 232)。 審美主義的なワイ

- ルドの批評理論の道徳的かつ教育的な側面に関しては、Quintusを参照。フェルススキが参照するラトゥールも、用いる言葉や存在論的な前提こそ異なるが、批判の限界の先で、対象との複数の関係を構築するような批評の在りようを論じている (Latour 246-47)。
- 9 ラクー＝ラバルトとナンシーが指摘するように「ロマン主義は我々自身のナイーブさ」(Lacoue-Labarthe and Nancy 17)である。盲目さを批判する批評家が自らの盲目性を見失うとき、批判は機械的な習慣と化し、自動的に道徳的な正しさの_AURAを批評家に与えると見なされるようになる。
- 10 “But wherever we have returned to Life and Nature, our work has always become vulgar, common, and uninteresting” (“The Decay of Lying” 225).
- 11 “Without the critical faculty, there is not artistic creation at all, worthy of the name” (“The Critic as Artist” 253).
- 12 ただし(フェルススキの指摘とは異なり)実際のワイルドの自然主義との関係はもっと複雑である。例えばMcDougallは同時代の自然科学(細胞説や進化論)の有機体論的な世界観と芸術的創造の弁証法的な解決の試みをワイルドに見出している。ワイルドの脳科学への関心が彼の美学を唯物論的民主主義と社会实践へと接続する契機となったと論じるElisha Cohnも次のように述べる。“Wilde comes closest to grounding the social promise of decorative aesthetic in his engagements with scientific materialism” (184). Cohnはダンディの好奇心、実験精神と同時代の自然科学の親近性も指摘している(195)。実験精神の自由を通じたデカダンスと科学実証主義の親和性についてはFergusonを参照。ダンディズムと科学実証主義が、客観性を求める男性的なストイシズムの点で結びつくことに関してはAdamsを参照。ヴィクトリア朝期の自己鍛錬やセルフコントロールといった道徳観と科学の客観主義の結びつき一般に関してはDaston and Galison. 美学と科学をともに突き動かしていた(カント由来の)「禁欲的命法」についてはLevineを参照。
- 13 “Yes, from the soul. That is what the highest criticism really is, the record of one’s own soul” (“The Critic as Artist” 261).
- 14 “The aim of art is simply to create a mood” (278)。ポストトゥルース時代のSNSによる安易かつ早急な批判の蔓延という事態からも伺えるように、批判のモード化によって、その科学主義的な正当性そのものが無効になりかねないのも事実である。しかしすでにこれだけ批判と情動が結びついた現代において、新たな習慣形成を目指すためには、あいもかわらず科学主義的批判の権威に縋り付くのではなく、一度モードの次元に立ち返った上で批評、そして批判の再考を行う必要があるはずである。その点において批判の情動性へのフェルススキ、そしてワイルドによる注目は、問題把握と解決への道標となるはずである。ただ同時に、こうした新たな批評実践へと向かう我々の動機が、習慣化した批判を繰り返すことの「疲れ」や「退屈さ」といった薄っぺらな情念に突き動かされたものとならないよう注意すべきであることも事実だろう。

- 15 スーザン・ソントグは“Notes on ‘Camp’”において、古いダンディーから新たなダンディーとしての「キャンプ」への移行期に位置する存在としてワイルドの名を挙げているが、彼女の述べるように、古いダンディーが野暮ったさを嫌悪し、反対にキャンプが積極的に自身のナイーブさを美学化する存在であるとすれば、その過渡期に位置するワイルドは、「批判」と「ナイーブさ」の間の両義性を生きる点において特権的な存在だとも言える。ヴァルター・ベンヤミンのフラヌール論などを参照しながら、グリックは、弁証法の停止した場所でこのような両義性を生きるワイルド的なダンディーをクイアなダンディー(queer dandy)と呼んでいる(Glick 8)。
- 16 ワイルドと脱構築批評を比較してLongxiは次のように述べる。“While the deconstructive critic takes great pains to pull the text apart by exposing its fissures or internal inconsistencies, Wilde’s aesthetic critic is much more interested in the pleasure of the text, the enjoyment of the beautiful” (99).

引用文献

- Adams, James Eli. *Dandies and Desert Saints: Styles of Victorian Masculinity*. Cornell UP, 1995.
- Baudelaire, Charles. *The Painter of Modern Life and Other Essays*. Translated by Jonathan Mayne, Phaidon Press, 1964.
- Benjamin, Walter. *Charles Baudelaire: A Lyric Poet in the Era of the High Capitalism*. Translated by Harry Zohn, Verso, 1997.
- . *The Arcades Project*. Translated by Howard Eiland and Kevin McLaughlin, Harvard UP, 1999.
- Best, Stephen, and Marcus, Sharon. “Surface Reading: An Introduction.” *Representations*, vol.108, 2009, pp.1-21.
- Butler, Judith. “What is Critique? An Essay on Foucault’s Virtue.” *The Political*, edited by David Ingram, Blackwell, 2002, pp.212-28.
- Cohn, Elisha. “‘One single ivory cell:’ Oscar Wilde and the Brain.” *Journal of Victorian Culture*, vol.17, no.2, 2012, pp.183-205.
- Dancer Thom. Rev. of *Literary Criticism: A Concise Political History*, by Joseph North. *Comparative Literature*, vol.71, no.1, 2019, pp.117-21.
- Daston, Lorraine, and Galison, Peter. “The Image of Objectivity.” *Representations*, vol.40, 1992, pp.81-128.
- Dellamora, Richard. “Productive Decadence: ‘The Queer Comradeship of Outlawed Thought’: Vernon Lee, Max Nordau, and Oscar Wilde.” *New Literary History*, vol. 35, no. 4, 2004, pp. 529-46.
- de Man Paul. *Allegories of Reading*. Yale UP, 1979.
- . *The Rhetoric of Romanticism*. Columbia UP, 1984.

- . *Resistance to Theory*. U of Minnesota P, 1986.
- . *The Post-Romantic Predicament*. Edinburgh UP, 2012.
- Felski, Rita. *The Limits of Critique*. U of Chicago P, 2015.
- Ferguson, Christine. "Decadence as Scientific Fulfillment." *PMLA*, vol.117, no.3, 2002, pp. 465-78.
- Foucault, Michel. "What is Enlightenment?" *The Foucault Reader*, edited by Paul Rainbow, translated by Catherine Porter, Pantheon Books, 1984.
- Glick, Eliza. *Materializing Queer Desire: Oscar Wilde to Andy Warhol*. State U of New York P, 2009.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Routledge, 1983.
- Johnson, Barbara. *A World of Difference*. The Johns Hopkins UP, 1987.
- Lacoue-Labarthe, Philippe, and Nancy, Jean-Luc. *The Literary Absolute: The Theory of Literature in German Romanticism*. Translated by Philip Barnard and Cheryl Lester, State U of New York P, 1988.
- Latour, Bruno. "Why Has Critique Run out of Steam?: From Matters of Fact to Matters of Concern." *Critical Inquiry*, vol.30, no.2, 2004, pp.225-48.
- Levine, George. "Two Ways Not to Be a Solipsist: Art and Science, Pater and Pearson." *Victorian Studies*, vol.43, no.1, 2000, pp. 7-41.
- Longxi, Zhang. "The Critical Legacy of Oscar Wilde." *Texas Studies in Literature and Language*, vol.30, no.1, 1988, pp. 87-103.
- McDougall, Kathleen. "Oscar Wilde: Sexuality and Creativity in the Social Organism." *Victorian Review*, vol.23, no.2, 1997, pp.212-26.
- North, Joseph. *Literary Criticism: A Concise Political History*. Harvard UP, 2017.
- Quintus, John Allen. "The Moral Implications of Oscar Wilde's Aestheticism." *Texas Studies in Literature and Language*, vol.22, no.4, 1980, pp.559-74.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*. Duke UP, 2003.
- Small, Ian. *Oscar Wilde Revalued: An Essay on New Materials and Methods of Research*. ELT P, 1993.
- . *Oscar Wilde, Recent Research: A Supplement to "Oscar Wilde Revalued."* ELT P, 2000.
- Sontag, Susan. "Notes on 'Camp'." *Partisan Review*, vol.31, no.4, 1964, pp.515-30.
- Stavros, Gorge. "Oscar Wilde on the Romantics." *English Literature in Transition 1880-1920*, vol.20, no.1, 1977, pp.35-45.
- Sussman, Herbert. "Criticism as Art: Form in Oscar Wilde's Critical Writings." *Studies in Philology*, vol.70, no.1, 1973, pp.108-22.
- Warner, Michael. "Uncritical Reading." *Polemic: Critical or Uncritical*, Routledge, 2004, pp.13-38.
- Wilde Oscar. *Oscar Wilde: The Major Works*, edited by Isobel Murray, Oxford UP, 2000.

オスカー・ワイルドの批評的無意識——批判とナイーブさの間の「批評」

Wordsworth, William. *The Prose Works of William Wordsworth*, vol.2, edited by W.J.B. Owen and Jane Smyser, Clarendon Press, 1974.